

# 英語自由間接話法の日本語訳に引用符が与える影響： Jane Austen の小説と翻訳テキストの比較分析

山 口 美知代

## 1 はじめに

本稿の目的は、英語の自由間接話法 (free indirect speech, FIS) が日本語に翻訳されるときに、英文テキストにおける引用符の有無が訳文にどのような影響を与えているかを Jane Austen の *Emma* と *Persuasion* とその翻訳 テキストを比較分析しながら調べることである<sup>1)</sup>。

英語の FIS や、これに対応するドイツ語の体験話法 (Erlebte Rede), フランス語の自由間接話法 (style indirect libre) の日本での研究は、保坂・鈴木(1993)に収められた研究史と文献一覧が示すように、1910年代から議論が盛んになったヨーロッパの自由間接話法 (体験話法) 研究の成果が、1930年代に日本に紹介され始めたとき以来の歴史をもっている<sup>2)</sup>。このなかで日本語との比較の試みも、

- [1] (1)英独仏語の自由間接話法 (体験話法) の日本語への翻訳の視点
- (2)英独仏語の自由間接話法 (体験話法) に対応する日本語の「体験話法」「描出話法」の可能性を探る視点
- (3)日本文学の英独仏語への翻訳における自由間接話法 (体験話法) 使用分析の視点

の三つの視点から比較的早い時期から行われてきた<sup>3)</sup>。本稿は(1)の視点からのものなので、この分野の先行研究が指摘してきたことをまとめておこう。まず、訳出にあたる心構えとしては、原文の自由間接話法 (体験話法) を「直接話法に還元」して、基本的な意味関係を確認してから日本語へ訳すべきだという指摘がよくなされる。(鈴木1987 他)そして、実際に訳文を検討した結果として指摘されるのは、原文では発話者もしくは思考者を指す三人称代名詞が、日本語の訳文では一人称とも三人称とも明示されていないことが多く (保坂1981 他)、「自分」が使われることも多い (松井1959, 1983 他)、ということである。また原文にはない伝達部が訳文で補われることもある (松井1959, 1983 他)。これらをふまえて本稿では、英語 FIS の日本語訳に際して、FIS 箇所引用符が存在することが、日本語の訳文選択にどのような影響を与えているかを考察する。

山口 (1993) で英語 FIS の日本語訳研究の今後の課題としてあげた問題は、どういう FIS 指標を使った FIS 箇所が「語り手寄りの訳出」つまり地の文としての訳出傾向が強く、逆にどういう FIS 指標を使った FIS 箇所が「登場人物寄りの訳出」つまり発話としての訳出傾向が強いのかという、FIS 箇所の訳出傾向とそこで使われている FIS 指標の相関を調べることであった<sup>4)</sup>。本稿ではその第一の試みとして、FIS における引用符の有無と訳出傾向の関係を調べるのである。

引用符の問題をとりあげるのは、次の三つの理由による。第一に、引用符は FIS 箇所が発話であることをもっともはっきりと示す指標の一つだからである。山口 (1993) でとりあげた 8 箇所の FIS のなかには、もっとも登場人物寄りに、あたかも直接話法 (direct speech, DS) で書かれた発話であるかのように訳出されていた FIS が 2 箇所あったが、そこではどちらも引用符が使われていた。これはデータとしては量的に十分でないが、ここから引用符が訳文の選択に大きな影響力をもつという仮説が立てられた。

第二に、英独仏語の自由間接話法 (体験話法) の日本語訳の研究のなかで、引用符の問題はまだとりあげられていないからである。英語 FIS の研究で Jane Austen のテキストがとりあげられることは多く、またそのなかでは引用符ありの FIS (以下 “FIS” と表す) と引用符なしの FIS (以下 [FIS] と表す) の差異も論じられている<sup>5)</sup>。しかし Austen の “FIS” と [FIS] が日本語への翻訳でどう扱われているかは、まだ研究がなされていないので、考察の必要があると考える。

第三に、引用符は他の FIS 指標とは通時的な意味で性質を異にするからである。次節で述べるように、引用符が FIS に使用されることがあるのは主に 19 世紀前半までの小説においてであり、全ての時代のテキストの FIS 分析において、引用符の使用を他の FIS 指標と並列させ、同等に扱うことはできない。だから一般的な FIS の日本語訳を論じる前に、Austen の小説とその翻訳テキストの比較分析というように範囲を限定したうえで、引用符の問題を扱っておく必要があると考えるものである。

なお本稿では発話描出のみを扱い、FIS と同じ統語的特徴をそなえる思考描出の自由間接思考 (free indirect thought, FIT) は議論の対象から除外する。これは Leech & Short (1981) の speech and thought presentation の枠組みに従い、発話と思考を区別するからである。発話に関しては narrative report of speech act (NRSA), indirect speech (IS), free indirect speech (FIS), direct speech (DS), free direct speech (FDS) を設定する<sup>6)</sup>。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節では Austen の FIS と引用符に関する先行研究を紹介し、問題点を整理する。第 3, 4 節では *Emma* と *Persuasion* の “FIS” / [FIS] 箇所と翻訳テキスト中の対応箇所を比較分析し、第 5 節では引用符の影響力を考察する。

## 2 Austen の FIS と引用符

発話の描出の際に引用符が使われるのは今日の英語では基本的に DS のときのみである (Quirk, et al 1985, pp. 1022-) が、通時的にみると、少なくとも 19 世紀の初めまではこれとは違

う引用符の使い方があった。作家でいうならば、Austen (1775-1817)にはISやFISに引用符が用いられる例が少ないが、Dickens (1812-1870)ではもう見られず(Page 1973, pp.30-1)、一般に小説中で発話を表す「印刷上の工夫」(graphic device)は19世紀に固定されたと考えられている(Parkes 1992, p.94)。

AustenのFISについての先行研究でなされてきた引用符に関する考察は、主に次の3点に関するものである。

- [2] (1)引用符はAusten自身が使用したのか、出版社が後に付け加えたものか
- (2)引用符は読者にどのような影響を与えるか
- (3)“FIS”と[FIS]の区別に規則性はあるか

まず第一に、引用符を用いたのがAusten自身であるか、それとも出版社であるか、という議論がある。FISについての引用符はAustenが使用したものではなくて、全て出版社の挿入だとするTandrup (1983, p.86)の主張は、*Persuasion*の書直し前の直筆原稿のなかにすでに引用符つきFISが存在することを指摘して、反論の根拠としたAtkins (1993, p.34)によって誤りだと証明された。しかし逆に、全ての引用符がAustenの使用だと断定する根拠もない<sup>7)</sup>。もっとも翻訳に使われたテキストのなかの“FIS”の引用符が、訳文の選択にどのような影響を与えたか調べるかぎりにおいては、引用符を用いたのが誰かということは大きな問題ではない。全ての引用符がAustenの使用だと断定する根拠はないが、それを否定する根拠もない今、本稿では以下、引用符がAustenによって使用されたという前提で議論をすすめる。

第二に、FISについての引用符が読者に与える影響についてである。これは引用符の機能から考えて直観的にも明らかであるが、読者にとってFIS箇所が発話であるという認知を助けるという指摘がある(Pascal 1977, p.44, Tandrup 1983, p.86)。

第三に、引用符ありの“FIS”と引用符なしの[FIS]を比較する、FISにおける引用符の機能に関する考察がある。これは本稿の議論と深く関わってくる点でなので、詳しく見ておこう。この点に関しては、Austenの小説全体を見たときに、FISの引用符使用に関する一貫した規則性はないというPage (1973, p.126)やAtkins (1993, p.34)の見解が一方にあり、他方に[FIS]から“FIS”へ移行する箇所の「効果」を分析すると、その違いが見られるという中川(1983)や浅若(1992)の見解がある。が、この二つの議論は一見相矛盾するように見えるがそうではない。というのも前者は“FIS”と[FIS]を区別する、全体的、絶対的な規則の有無を論じたものであり、後者は“FIS”の局所的、相対的な機能を考察するものだからだ。

局所的にみると“FIS”は[FIS]とは「間接度を異にする再現法」(中川1983, p.139)であり、[FIS]から“FIS”に移行する場合には“FIS”の方がよりDSに近づいている」(浅若1992, p.17)という相対的な機能が見られるのである。たとえば中川(1983)と浅若(1992)の両方で引用された[FIS]から“FIS”への移行箇所を見てみよう。(下線は筆者によるもので[FIS]およ

び“FIS”を表す。以下同じ)

- [3] Half a minute brought it all out. She [=Harriet] had heard, as soon as she got back to Mrs. Goddard's, that Mr. Martin had been there an hour before, and finding she was not at home, nor particularly expected, had left a little parcel for her from one of his sitsters, and gone away; and on opening this parcel, she had actually found, besides the two songs which she had lent Elizabeth to copy, a letter to herself; and this letter was from him, from Mr. Martin, and contained a direct proposal of marriage. “Who could have thought it! She was so surprized she did not know what to do. Yes, quite a proposal of marriage; and a very good letter, at least she thought so. And he wrote as if he really loved her very much – but she did not know – and so, she was come as fast as she could to ask Miss Woodhouse what she should do.” – Emma was half ashamed of her friend for seeming so pleased and so doubtful. (*Emma* p.50)

ここでは Harriet の発話が最初は “She had heard. . .” から始まる [FIS] で、次に “Who could have thought it! . . .” から始まる “FIS” で描かれている。[FIS] と比べると “FIS” 部分のほうが、“Who could have thought it!” の疑問文構造や感嘆符、“Yes, quite a proposal of marriage.” の Yes の使い方など、統語的に補文である IS では許されず DS でのみ許される構造が使われていて、この点では、[FIS] よりも DS に近いといえよう。

だが一方で、統語的であれ直示的表現であれ、“FIS” と [FIS] を明確に区別する絶対的な規則性はないのである。たとえば次の例をみたときに、この [FIS] が [3] の “FIS” に比べて統語的に DS に近くない、とは言えない。

- [4] He [=Frank Churchil] was immediately interested. Its character as a ball-room caught him; and instead of passing on, he stopt for several minutes at the two superior sashed windows which were open, to look in and contemplate its capabilities, and lament that its original purpose should have ceased. He saw no fault in the room, he would acknowledge none which they suggested. No, it was long enough, broad enough, handsome enough. It would hold the very number for comfort. They ought to have balls there at least every fortnight through the winter. Why had not Miss Woodhouse revived the former good old days of the room? – She who could do any thing in Highbury! (*Emma* pp.197-8)

ここでは Frank Churchil の発話が “No, it would . . .” の [FIS] で描出されているが、この [FIS] では No の使い方や、“Why had not Miss Woodhouse revived the former good old days of the rooms?” の疑問文構造など、[3] の “FIS” のような構造が使われており、[3] と [4] を比

べただけでも、引用符の有無を決定する一貫した規則性の存在を考えることは難しい。やはり FIS の引用符の使用には一貫した絶対的な規則性はなく、局所的にみたときに相対的な違いがあるのみであるといえよう。

### 3 分析

#### 3.1 分析の方法

FIS の日本語訳で引用符がどのような影響力をもっているかを調査するために、Austen の *Emma* と *Persuasion* および、その日本語訳テキスト『エマ』（阿部知二訳）と「説得」（近藤いね子訳）を比較する<sup>8)</sup>。Austen の小説のなかから *Emma* と *Persuasion* を選んだのは、これらが Austen の作品のなかで FIS の使用が最も多いからである<sup>9)</sup>。国立国会図書館(1959)と笠原(1991)によると、*Emma* の日本語訳は阿部知二訳のみであるが、*Persuasion* のほうは他に富田彬訳『説きふせられて』（1942）と阿部知二訳『説きふせられて』（1968）がある。その中でこの翻訳を選んだのは、*Emma* が阿部知二訳なので、異なる訳者のものを使うことによって、FIS の日本語訳における引用符の影響という問題に関して、個人の文体を越えた共通の傾向の可能性を調べられると考えたからである。また富田訳でなく近藤訳を選んだのは、富田訳が翻訳に際して使用したテキストを明記していないからである。引用符の問題を扱うときには、テキストの版による異同が関係するので、テキストが明記していない翻訳を使うのは危険であると考えた<sup>10)</sup>。

#### 3.2 分析した“FIS” / [FIS] 箇所

*Emma* と *Persuasion* を通読して、*Emma* から“FIS”を36箇所、[FIS]を14箇所、*Persuasion* から“FIS”を21箇所、[FIS]を10箇所選んだ<sup>11)</sup>。“FIS” / [FIS] の訳出に際して、引用符の持つ影響力を調べるのが本調査の目的であるので、“FIS” / [FIS] 共に伝達節がついているものは分析の対象から外した。また“FIS”では、文の一部だけが“FIS”となっているものは除き、[FIS]では一文の中で NRSA や IS から徐々に [FIS] へと移行しているものを除外した。[FIS]については、その本質ともいえる dual voice 性から、語り手が地の文として描出しているのか、登場人物の発話を語り手中心の時制と人称に移行して述べているのか区別ができないものが少なくない。どこまでを [FIS] とし、どこまでを語り手の地の文とするのかは、最終的には各読者の判断に委ねられている。本稿では、登場人物の発話を語彙や文・談話の構造の面できただけ「リアルに」描出したと思われる [FIS] 箇所、つまり dual voice の中で narrator's voice よりも character's voice を前景化したと思われる [FIS] 箇所を選んだ。そのときに判断基準としたのは、その [FIS] 箇所を登場人物中心の時制・人称に移行し「DS に還元」しても、語彙・統語的構造の面から登場人物の発話として不自然でないかどうかであった。またその他には、先行・後続文脈に NRSA, IS, DS, speech act verbs/nouns などが存在すれば、それも発話の存在を裏付けるものとして重視した<sup>12)</sup>。

なお、“FIS”として選んだものの中には *Emma* で1箇所、*Persuasion* で2箇所、“FIS”の始まりを示す引用符はあっても、終わりを示す引用符がないところがある<sup>13)</sup>。

### 3.3 訳文分析の方法

“FIS” / [FIS] 箇所の訳文を分析するには、第1節で触れた先行研究の知見もふまえ、次の8項目に注目し、それぞれの訳文の中でこれらの要素が使われているかどうかを調べた<sup>14)</sup>。

- [5] ①カギカッコ  
②敬体の助動詞  
③ムードの終助詞  
④1人称代名詞 (=発話者)  
⑤「自分」 (=発話者)  
⑥引用節  
⑦3人称代名詞 (=発話者)  
⑧語り手中心の過去時制

①②③④は件の箇所が登場人物の視点による直接話法であることを示すものである<sup>15)</sup>。

まず①カギカッコであるが、これを登場人物の直接話法のマーカーだとするのは、藤田(1989)に従ってのことである。藤田(1989)では「『引用』のくぎり方」としてカギカッコの用法を記述するなかで、

[6] 彼は私が正しいと言った。

[7] 彼は「私が正しい」と言った。

を比べ、[6]は直接話法読み(「私」=「彼」と、間接話法読み(「私」=「全文の話し手」)の両方の読みが可能であるのに対し、[7]は「間接話法としては(絶対とはいえないかもしれないが)読みにくくなるように感じられる」(p.65)として、その理由を「カギカッコが現実発話されたコトバをリアルな形で(ということは、もとの形に近く)示しているという印象を与えるものであり、カギカッコの中が話法転換によってもとの発話から変容したものとしては読みにくいから」(p.65)と説明している。

次に、②敬体の助動詞、③ムードの終助詞、④1人称代名詞 (=発話者)であるが、これらを語り手寄りの訳出の指標とする理由は、*Emma* と *Persuasion* における語りの構造の中で説明するほうがいだろう。*Emma* と *Persuasion* では語り手は、基本的に登場人物を3人称で言及し、過去時制で物語を語る。1人称を使った語り手の介入はないので、『エマ』『説得』の地の文にはムードの終助詞や1人称代名詞は現れない。また『エマ』『説得』の地の文は常体が基本である。

このような語りの構造をもつテキストにおいては、②敬体の助動詞、③ムードの終助詞、④1人称代名詞は地の文には属さず、登場人物の直接話法の要素だと考えられる。②③④は“FIS” / [FIS] が登場人物の直接話法として訳されていることの指標になるのだ。

なお、②③④の階層性であるが、鎌田(1988)は②敬体の助動詞や③ムードの終助詞を備えた直接話法と、④1人称代名詞のみを備え、視点の上では直接話法であるが②③を備えていないものを区別し、前者を「直接話法」、後者を「劇的効果」の欠けた「準直接話法」と呼んでいる<sup>16)</sup>。筆者はこの区別は重要だと考えるが、「直接話法」「準直接話法」という表現は使わず、前者を「劇的効果のある直接話法」、後者を「劇的効果のない直接話法」と呼ぶ。というのも、「直接話法」という呼称は両者をまとめて指すのに確保しておく必要があると考えるからである。なおここでは「劇的効果のある」という表現は「敬体助動詞とムードの終助詞の両方またはどちらか一方を備えた」と等価に使用しており、「劇的効果」の内容を考えるものではない。

次に、“FIS” / [FIS] での発話者である登場人物を指す英語の3人称代名詞に対応して、日本語の訳文で「自分」が使われているときがあるので、それを⑤の指標とした。「自分」には「発話、思考、意識などを表す動詞に従属する節の中で用いられる」と「その発話、思考、意識の発話者、経験者を指す機能を持つ」（久野1978, p.213）という談話機能があり、“FIS” / [FIS] 対応箇所で使用されるとそこに登場人物寄りの視点を導入することになる<sup>17)</sup>。

⑥引用節であるが、英文テキストから“FIS” / [FIS] を選ぶときには伝達節のないものを選んでいくが、日本語訳においては引用節が挿入されているところがあるので、これを発話としての訳出の指標と考えた。「・・・といった」や「・・・という」などの引用節が挿入されるとそれに先行する箇所が発話であることが明示される。その発話が直接話法と明示されているかどうかは別問題だとしても、⑥は発話であることは示すのである。

⑦は、“FIS” / [FIS] で発話者を指す3人称代名詞を、日本語訳でも3人称代名詞を使って訳出していた場合である。それは語り手中心の人称代名詞の使い方なので、語り手の視点を反映しており、訳文は登場人物の発話としてよりもむしろ地の文としての訳出に近くなる。3人称代名詞(=発話者)は語り手寄りの訳出の指標の一つとして考える。

⑧の語り手中心の過去時制とは、“FIS” / [FIS] を発話として訳すのならば現在時制を使うのが適当であるところに、過去時制が使われている場合を指す。日本語の引用構造では、引用される文の時制はいつでも元話者(引用される話者)中心であって、英語のように引用者(引用する話者)中心になることはない。だから“FIS” / [FIS] 対応箇所の時制が語り手中心であるか登場人物中心であるかは、訳出傾向の指標となるのである。

最後にこの①から⑧の指標を使って実際にどのように訳文分析を行うか簡単な例を使って説明しておこう。例えば次の下線部のような[FIS]があるとすると、そのときに日本語への訳出の仕方は何通りも考えられる。いくつかの訳例をあげ、そこで使われている指標を丸カッコ内に示す。

- [8] When her father and mother decided to go out for a walk, she didn't join them. No, she wouldn't go. She had too many things to do today.
- [8a] いえ、私は行きません。今日はすることがたくさんあるの。(②③④)
- [8b] いえ、行かない。自分は今日はすることがたくさんある。(⑤)
- [8c] いえ、行かない、今日はたくさんすることがあるという。(⑥)
- [8d] いえ、彼女は行かない。彼女は今日はすることがたくさんある。(⑦)
- [8e] いえ、彼女は行かなかった。彼女は今日はすることがたくさんあった。(⑦⑧)
- [8f] 「いえ、私は行きません」 彼女は今日はすることがたくさんあった。(①②④⑦⑧)

ここでは[8a]が一番登場人物寄りの訳出の指標が現れているのに対し、[8e]は語り手寄りの訳出の指標が最も多く、最も語り手寄りの訳出となっている。また[8f]のように一つの[FIS]箇所が、一部分は登場人物寄りに訳され、また他の部分は語り手寄りに訳されているということもある。

## 4 分析

本節では、まず『エマ』の“FIS” / [FIS] の訳出傾向を調べ、次に「説得」の“FIS” / [FIS] の訳出傾向を調べる。各訳出傾向指標を最初に説明する箇所では例となる具体的な訳文を引用するが、次からは省略する。

### 4.1 『エマ』の“FIS” / [FIS] 訳出

『エマ』で“FIS” / [FIS] を訳すときに、登場人物寄りで訳されたのか、語り手寄りで訳されたのかを調べるのに、前節で説明した①から⑧の訳出傾向指標の使用状況をみた。それぞれの指標が36箇所の“FIS”と14箇所の[FIS]の中の何箇所で使われてきたかをまとめたのが表1である。1箇所の“FIS” / [FIS] で一つの指標が数回現れたとしてもそれは1として数える。例えば表1の②の欄が示しているのは、『エマ』では②を1回以上使った“FIS”が32箇所、[FIS]が1箇所あるということである。



表1：『エマ』の“FIS” / [FIS] 対応箇所各訳出傾向指標が使用された数

	① カギカッコ	② 敬体助動詞	③ ムード終助詞	④ 1人称	⑤ 「自分」	⑥ 引用節	⑦ 3人称	⑧ 語り手過去
“FIS” 36箇所	36 (100%)	32 (89%)	22 (61%)	17 (47%)	1 (3%)	2 (6%)	1 (3%)	1 (3%)
[FIS] 14箇所	0 (0%)	1 (7%)	1 (7%)	1 (7%)	2 (14%)	3 (21%)	7 (50%)	2 (14%)

表1が示すのは、“FIS”と[FIS]の訳出にはかなり違いがあり、“FIS”では①②③④といった登場人物の直接話法であることを示す指標が多く用いられているのに対し、[FIS]では全体として指標の使用が少なく、ただその中では語り手寄りの訳出の指標である⑦が多いということである。“FIS”は登場人物寄りに訳出され、[FIS]は語り手寄りに訳出される傾向が強いといえるであろう。

ただし、ひとつの“FIS” / [FIS]箇所は「登場人物寄り」もしくは「語り手寄り」のどちらかのみで訳出されているとは限らず、部分的に異なった方法で訳されることもがされる場合もあるのだが表1ではそれはわからない。そこで次の表2では各“FIS” / [FIS]箇所の①から⑧の指標の使用状況を示した。各“FIS” / [FIS]箇所にはページ数で言及する。1ページに複数の“FIS” / [FIS]があるときは先のものからA, Bとする。ここでは登場人物寄りの訳出が強く出ているものを上の方にならべ、語り手寄りの訳出が強く出ているものを下の方にした。なお、登場人物寄りの訳出が強く出ているもの、つまり①②③④を使っているもののなかでの順は、使用回数の多かった指標を軸に整理して並べた。表2では①カギカッコの欄にある●は“FIS” / [FIS]箇所全体がカギカッコに入っていること、▲は訳文の一部がカギカッコでくくられていることを示す。②から⑧に関しては“FIS” / [FIS]に対応する訳文に一回でもその指標が使われていれば●とする。

表2：『エマ』の“FIS” / [FIS] 対応箇所の訳での訳出傾向指標使用状況（個々の例について）

ページ	“FIS”								ページ	[FIS]							
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
28	●	●	●	●					424		●	●			●		
49	●	●	●	●					466				●			●	
50	●	●	●	●					141-2				●				
128	●	●	●	●					449				●			●	
177-8	●	●	●	●					81					●			
193	●	●	●	●					298					●			
251	●	●	●	●					204A								
272	●	●	●	●					204B								
291	●	●	●	●					254								
411	●	●	●	●					50							●	
448	●	●	●	●					70							●	
109	●	●	●						316							●	
156	●	●	●						363-4							●	●
169	●	●	●						391							●	●
199	●	●	●														
220	●	●	●														
297-8	●	●	●														
359	●	●	●														
380	●	●	●														
479	●	●	●														
46-7	●	●		●													
196	●	●		●													
316	●	●		●													
356-7	●	●		●													
389	●	●				●											
191	●	●															
361	●	●															
364	●	●															
390	●	●															
403	●	●															
424	●	●															
209	●		●	●		●											
70	●			●													
248	●																
387-8	●																
469	▲	●	●		●		●	●									

表1, 表2をもとに, 例文をあげながら, さらに詳しく“FIS” / [FIS] の訳文を検討してみよう。

『エマ』の“FIS”では①のカギカッコが36箇所全てに用いられていて, そのうち1箇所は部分的ではあるものの, 全箇所登場人物の直接話法として訳出されていることがわかる。そのほかの直接話法を表す指標も, ②敬体の助動詞も32箇所(89%), ③ムードの終助詞が22箇所(61%), ④1人称代名詞が17箇所(47%)と, 多く用いられているのだが, 特に②③という「劇的効果のある直接話法」を表す指標の使用が多く, なかでも②が“FIS”の9割近くで使われていることが特徴的である。例えば次の例に見られるような, 訳し方が多いのだ。(太字による強調は筆者による。以下同じ。斜字体による強調は原文のまま)

[9] -but this invitation was not given with equal satisfaction, and on many accounts Emma was particularly pleased by Harriet's begging to be allowed to decline it. “She would rather not be in his company more than she could help. She was not yet quite able to see him and his charming happy wife together, without feeling uncomfortable. If Miss Woodhouse would not be displeased, she would rather stay at home.” (*Emma* p.291)

—しかしエマは, この招待を, 他の人々のばあいと同じ喜びをもって出したわけではなく, 数々の理由から彼女は, ハリエットが辞退させていただきたいといったのに, とくに満足した。「できますことでしたら, あの方といっしょにいたくはありませんの。あんな美しい幸福な奥さまとごいっしょのあの方を見れば, 悲しくならずにはいられませんから。あなたがご機嫌を悪くなさらないのでしたら, わたしはやはり家にいたいのですけど」(『エマ』 p.426)

これはカギカッコ, 敬体の助動詞「です」「ます」, ムードの終助詞「の」, 1人称代名詞「わたし」が現れていて, ①②③④全ての指標を使っている例である。表2からも明らかなようにこうした例は11箇所ある。この他にも①②③を使っている例が9箇所, ①②④が4箇所, ①②⑥が1箇所, ①②が6箇所, ①③④⑥が1箇所, ①④が1箇所など, たいていの例が2つ以上の指標によって登場人物の直接話法だと明示されている。

⑤の「自分」(=発話者), ⑦の3人称代名詞(=発話者), ⑧の語り手中心の過去時制は, それぞれ1箇所ずつと頻度が少ない。なお, カギカッコが全箇所で行われているのに, 直接話法読みを許さない⑤⑦⑧が1箇所ずつあるのは, 1箇所(p. 469), カギカッコが“FIS”対応箇所の一部にのみ使われているところがあったためである。この“FIS”箇所は, “FIS”の始まりを示す引用符はあるが, 終わりを示す引用符がない箇所であり, いわば終わりは[FIS]だともいえる。これが訳出に影響していることが考えられるだろう。(テキストには参照のために番号をつけた)

- [10] —But Mrs. Elton was very much discomposed indeed. — (1) “Poor Knightley ! poor fellow ! — sad business for him. — (2) She was extremely concerned; for, though very eccentric, he had a thousand good qualities. — (3) How could he be so taken in ? — (4) Did not think him at all in love — not in the least. — (5) Poor Knightley ! — (6) There would be an end of all pleasant intercourse with him. — (7) How happy he had been to come and dine with them whenever they asked him ! (8) But that would be all over now. — (9) Poor fellow ! — (10) No more exploring parties to Donwell made for her. (11) Oh ! no; there would be a Mrs. Knightley to throw cold water on every thing. — (12) Extremely disagreeable ! (13) But she was not at all sorry that she had abused the housekeeper the other day. — (14) Shocking plan, living together. (15) It would never do. (16) She knew a family near Maple Grove who had tried it, and been obliged to separate before the end of the first quarter.  
(Emma p.469)

—一方エルトン夫人は、まったく落ちつきを失った。— (1)「お気の毒なナイトリー！—可哀そうに！—あの人にとっては悲しむべきことだわ」— (2)彼女がきわめて心配だった。というのは、ひどく風変わりな男だったけれども、彼には長所も数知れぬほどあったからである。— (3)彼がこんなにあんなにたぶらかされるなんて、あり得ることだろうか— (4)彼が恋におちいったなどとどうしても考えられなかった—夢にも。— (5)お気の毒なナイトリー！— (6)これで、彼との楽しい交際も終わってしまう。— (7)招いたときはいつもきて食事をともにして、なんと楽しげだったことだろう！ (8)だが、それもいまはみな終わってしまう。— (9)可哀そうに！— (10)もはや自分のためにドンウェルへの遠足会もなされなくなる。 (11)そうですとも！ナイトリー夫人がいて、あらゆることに冷水をかけることになるだろう。— (12)不愉快のかぎりだわ！ (13)でも先日自分があそこの家政婦の悪口をいったのを、すこしも後悔しないわ。— (14)いっしょに住むなんて、驚いた計画だわ。 (15)うまくなんかゆかないわ。 (16)メープル・グローブの近くでそれを試みたが最初の三ヶ月も終わらぬうちに別れなければならなくなった家族のことを、彼女は知っていた。(『エマ』 p.693)

訳文は、(1)では①カギカッコと③ムードの終助詞を、(11)では②敬体の助動詞を、(12)(13)(14)(15)では③ムードの終助詞を使って、登場人物寄りの訳にしているが、(2)(4)(16)は⑦3人称代名詞(=発話者)や⑧語り手中心の過去時制(「心配だった」「知っていた」)のある語り手寄りの訳にしている。また(3)(5)(6)(7)(8)(9)などは、①から⑧のどの指標も使っていないことで、登場人物寄りでも語り手寄りでもない、中間の訳出となっているが、これは次に説明する『エマ』の[FIS]でよく使われる訳出方法である。この箇所は訳出傾向も“FIS”のものから[FIS]のものへ移行しているようだ。

さて一方、『エマ』の [FIS] の訳出方法は“FIS”とはかなり違うことが表1, 表2からわかる。⑦3人称代名詞 (=発話者) が14の [FIS] のうち7箇所、つまり半数で用いられているのだ。これは“FIS”ではほとんど用いられていないものである。例えば次のような例がある。

- [11] She [=Emma] promised to think of it, and advised him [=Mr. Knightley] to think of it more; but he was fully convinced, that no reflection could alter his wishes or his opinion on the subject. He had given it, he could assure her, very long and calm consideration; he had been walking away from William Larkins the whole morning, to have his thoughts to himself. (*Emma* p.449)

彼女はその案を研究してみると約束し、彼にもっと研究するよう忠告した。だが彼は、この問題についてどんなに考えてみても、自分の願望や意見は変わらない、と完全に思いこんでいた。彼女にたいして保証することもできたが、彼はそのことをずいぶん長く冷静に考えてきたのである。自分一人で十分に考えるために、朝じゅうずっとウィリアム・ラーキンズからはなれて歩いていたのだった。(『エマ』 p.662)

これは Mr. Knightley の [FIS] による発話であるが<sup>19)</sup>、発話者自身に言及する He が「彼」と訳されていて、訳文は語り手寄りになっている。

もうひとつの語り手寄りの訳出の指標⑧語り手中心の過去時制を見てみよう。上の例では [FIS] の動詞が過去完了なので、日本語に訳すときに登場人物を中心にした時制を使っても過去時制を選ぶことになってしまう。が、次の例のように登場人物中心ならば現在時制を使うべきところでは、それにあえて反しているものは⑧は語り手寄りの訳出をするマーカーとして考えられる。例えば次のような例がある。

- [12] On that subject poor Miss Bates was very unhappy, and very communicative; Jane would hardly eat anything:— Mr. Perry recommended nourishing food; but every thing they could command (and never had anybody such good neighbours) was distasteful. (*Emma* p.391)

そのことについては、気の毒にベイツさんはたいそう悲しがつて、すっかり話してくれた。ジェインはほとんど何も食べようとはしない。—ペリー氏は滋養食をすすめたが、彼女たちの手にはいるものは、いっさい (これほどよい隣人をもった人がどこにあったろうか) 口に合わなかった。(『エマ』 p.576)

[FIS] 対応箇所日本語訳の第1文は“would hardly eat anything”を「ほとんど何も食べようとはしない」と現在時制で訳しているのに対し、第2文の“recommended”, “had”, “was distasteful”が「すすめた」「あった」「口に合わなかった」と過去時制で訳されている。この [FIS] 箇

所は「DSに還元」するのなら“Jane will hardly eat anything; – Mr. Perry recommends nourishing food; but every thing we can command (and never has anybody such good friends) is distasteful”となるところで、登場人物寄りの訳出をするなら第2文は、例えば、「ペリー氏は滋養食をすすめるのだが、私たちの手に入るものは、いっさい（これほどよい隣人をもっている人がどこにあるだろう）口に合わない」となるべきであろう。ここに過去時制が使われているというのは、語り手寄りの訳出の指標である。

また⑦は備えているが⑧はない訳が3箇所あることも注目すべきであろう。たとえば次の箇所の訳文第3文などである<sup>20)</sup>。

[13] Emma hung about him [=Mr. Woodhouse] affectionately, and smiled, and said it must be so; and that he must not class her with Isabella and Mrs. Weston, whose marriages taking them from Hartfield, had, indeed, made a melancholy change: but she was not going from Hartfield; she should be always there; she was introducing no change in their numbers or their comforts but for the better; and she was very sure that he would be a great deal the happier for having Mr. Knightley always at hand, when he were once got used to the idea. (Emma p.466)

エマは情愛深く父にすがりつき、微笑し、どうしてもそうしなければならないし、わたしをイザベラやウェストン夫人といっしょにはいけません、というのは、あの人たちは結婚してハートフィールドから出て行って、じっさいに悲しい変化をもたらしたが、わたしはハートフィールドから出てゆくものではありません。いつまでもここにいるのであって、家庭の人数や楽しみを増すことのほかには、変化も引き起こさない。父がひとたびそういうことに慣れさえすればナイトリー氏をいつもそばにおくことは、はるかに幸福になれることと彼女は信じて疑わない。 (『エマ』 p.688)

ここでは“she was very sure”に「彼女は信じて疑わない」を対応させている。「彼女」は⑦であるが、「信じて疑わない」の時制は⑧ではない。日本語では物語の地の文でもよく現在時制が用いられること(牧野1983)、また、これによって地の文と登場人物の発話の境界が曖昧になることは指摘されており(池上1986)、それを援用すれば、⑦⑧ともに備えた訳例のほうが⑦のみの訳例よりより語り手寄りであるといえるだろう。

このように語り手寄りの訳出を示す指標が多いのに対して、[FIS]では登場人物寄りの訳出の指標はあまり用いられていない。①カギカッコは1箇所も使われておらず、②敬体の助動詞、③ムードの終助詞、④1人称代名詞(=発話者)という他の直接話法のマーカーも1箇所ずつである。②と③が使われているのが次の例である。

[14] The “How d’ye do’s,” were quiet and constrained on each side. She asked after their

mutual friends; they were all well. – When had he left them? – Only that morning. He must have had a wet ride. – Yes. – He meant to walk with her, she found. (*Emma* p.424)

「ご機嫌いかが」のあいさつは、おたがいに静かでひかえ目なものだった。彼女はおたがいの友の安否をたずねた。みな元気ということだった。—いつあちらをお立ちになりました？—今朝がたです。—きっと雨の中を馬車を走らせたのでしょうね。—そうです。—彼が自分といっしょに歩くつもりであることを、彼女は知った。 (『エマ』 p.623-4)

『エマ』の [FIS] 箇所訳ではここが唯一「劇的効果のある直接話法」で訳されたところである。また、④の1人称代名詞が現れる唯一の例は次の箇所である。[FIS] はもう少し前から始まっているが、ここでは問題の箇所を中心に一部を引用する。

[15] Would not he [=Mr. Woodhouse] like to have him [=Mr. Knightley] always on the spot?  
– Yes. That was all very true. Mr. Knightley could not be there too often; he should be glad to see him every day; – but **they** did see him every day as it was. – Why could not they go on as they had done? (*Emma* p.466)

—父は、いつでも会えるところに彼を置きたくはないだろうか。そうだ。まったくそのとおりだ。ナイトリー君は、どんなにたびたびきてもきすぎるということはなかった。毎日でも彼には喜んで会いたいのだ。—だが、いまの状態のままで、われわれは毎日彼に会っているではないか。—どうしていままでどおりにつづけることができないのか。  
(『エマ』 p.689)

ここでは発話者と聞き手に言及している they が「われわれ」と訳されている。[11] [12] [13] の [FIS] に比べると [14] [15] は発話者が途中で変わり、対話となっているので、一人の発話者による [FIS] よりも、より発話らしく、登場人物寄りの訳出になっていると考えられる。

⑤「自分」(=発話者) や⑥引用節を使った例には次のようなものがある。

[16] Harriet did not consider herself as having any thing to complain of. The affection of such a man as Mr. Elton would have been too great a distinction. – **She** never could have deserved and nobody but so partial and kind a friend as Miss Woodhouse would have thought it possible.

Her tears fell abundantly – but her grief was so truly artless, that no dignity could have made it more respectable in Emma's eyes – and she listened to her and tried to console her with all her heart and understanding – (*Emma* pp.141-2)

ハリエットは、自分は何も苦情をいい立てることがないと考えていた。エルトン氏のよう

な男性の愛情は、あまりにも大きすぎる榮譽であったろう—自分などけっして彼には価値しなかったのだ—ウッドハウス嬢のような、自分をひいきにする親切な友人のほかは、だれもそのようなことが可能だとは思わなかったろう。

彼女の涙は、とめどもなく落ちた—その悲嘆は、まさに天真爛漫なものであって、エマの目には、いかなる権威あるものも、これほど気高くは見えなかったであろう—エマは彼女の言葉に耳をかたむけ、情と理とのかぎりをつくして彼女を慰めようとつとめ—  
(『エマ』 p.207)

ここでは発話者に言及する She が「自分」と訳されている<sup>21)</sup>。

次が⑥引用節を使った例である。

[17] His [= Mr. Elton's] ostensible reason, however, was to ask whether Mr. Woodhouse's party could be made up in the evening without him, or whether he should be in the smallest degree necessary at Hartfield. If he were, every thing else must give way; but otherwise his friend Cole had been saying so much about his dining with him — had made such a point of it, that he had promised him conditionally to come. (*Emma* p.81)

彼の表面上の理由は、今晚のウッドハウス氏のパーティーは彼がいなくても差しつかえがないかどうか、彼はいささかなりともハートフィールドでは必要な人間かどうかを、たずねることにあった。もし必要ならば、ほかのことはすべて犠牲にしなければならないが、そうでなければ、友人のコールが食事をともにしようとたびたびいって—あまりに熱心なので、さしつかえなければゆくといつてあるとのことだった。(『エマ』 p.120)

「とのことだった」に対応する表現は英文にはないが、この表現が使用されることにより、訳文では [FIS] 箇所が登場人物の発話だということが明らかになる。

最後に①から⑧のマーカーをひとつも持たない例も 3箇所あることを記しておこう。例えば次のようなものである。

[18] She was particularly struck by his manner of considering Mr. Elton's house, which, as well as the church, he would go and look at, and would not join them in finding much fault with. No, he could not believe it a bad house; not such a house as a man was to be pitied for having. If it were to be shared with the woman he loved, he could not think any man to be pitied for having that house. There must be ample room in it for every real comfort. The man must be a blockhead who wanted more. (*Emma* p.204)

彼女はとくに、彼がエルトン氏の家をながめたときの態度に感心した。教会ばかりでなく、その家へもいってみようとし、彼女たちといっしょになって、あらを探そうとはしな



かった。いや、そう悪い家だとは思えない。持っていたからといって人から気の毒がられるような家ではない。もし愛している婦人とともに住むことになるのなら、人はあの家を持っていたからといって気の毒がられるわけではないと思う。あの家には、あらゆる真実の快適さを味わうだけのゆとりは、十分あるにちがいない。あれ以上のものを欲しがる人があれば、それはばかにちがいない。(『エマ』 p.296)

ここには①から⑧までのどの指標もみられない。つまりこれは、登場人物寄りの発話としての訳出とも語り手寄りの地の文としての訳出とも明示されていない、両者の中間の訳出といえることができるだろう。

#### 4.2 「説得」の“FIS” / [FIS] 訳出

「説得」の“FIS” / [FIS] はどのように訳されているのか、前項と同じように訳出パターンを示すマーカーの使用状況を調べた。表3はそれぞれのマーカーが21箇所“FIS”、10箇所の[FIS]の中で何箇所使われているか示している。

表3：「説得」の“FIS” / [FIS] 対応箇所で各訳出傾向指標が使用された数

	① カギカッコ	② 敬体助動詞	③ ムード終助詞	④ 1人称	⑤ 「自分」	⑥ 引用節	⑦ 3人称	⑧ 語り手過去
“FIS” 21箇所	20 (95%)	16 (76%)	11 (52%)	8 (38%)	0 (0%)	5 (29%)	2 (10%)	3 (14%)
[FIS] 10箇所	2 (20%)	2 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (30%)	7 (70%)	1 (10%)	0 (0%)

表3を見ると、“FIS”と[FIS]にかなり訳出傾向の違いがあるのがわかる。これは『エマ』と同じであり、特に“FIS”の訳出傾向が『エマ』と似ている。つまり、“FIS”では①②③④といった登場人物の直接話法であることを示す指標が多く用いられているのだ。これに対し「説得」の[FIS]は『エマ』とは少し異なる傾向を示している。語り手寄りの訳出の指標である⑦⑧が少なく、『エマ』の[FIS]ほど語り手寄りの訳出傾向が強くないのだ。

次の表4では各“FIS” / [FIS] 箇所の①から⑧の指標の使用状況を示した。表2と同じ方法で作成したものである。

表4：「説得」の“FIS” / [FIS] 対応箇所の訳での訳出傾向指標使用状況（個々の例について）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
48	●	●	●	●		●			139	●	●			●	●		
114	●	●	●	●					190	●					●		
121	●	●	●	●					174		●				●		
149	●	●	●	●					115					●	●		
211	●	●	●	●					144					●			
122	●	●	●						90						●		
141A	●	●	●						112						●		
141-2	●	●	●						22						●	●	
142	●	●	●						113								
187	●	●	●						122								
190	●	●		●													
13	●	●															
143	●	●				●											
157	●	●				●											
144	●	●															
141B	●		●	●													
55	●			●													
113	●																
74	▲	●				●	●	●									
145-6	▲					●	●	●									
105								●									

表3, 表4をもとに, まず“FIS”の訳出から詳しく見ていこう。まず①のカギカッコの使用が21箇所中20(95%)と非常に多いのは『エマ』と同じである。ただこのうち2箇所(p.74, p.145-6)が“FIS”対応箇所を部分的にカギカッコでくくったものなので, 結果的には3箇所(p.74, p.105, pp.145-6)でカギカッコ外の訳があるということになる。もっとも①②③④の順に使用が減っているという傾向は同じであるが, ②の敬体の助動詞が16箇所(76%), ③のムードの終助詞が11箇所(52%), ④の1人称代名詞(=発話者)が8箇所(38%)という頻度は, それぞれ『エマ』より少しずつ低い。“FIS”の語り手寄りの訳出のマーカー⑦⑧は, カギカッコ外にあたる訳文が3箇所あるため, そこで⑦が2箇所(p.74, pp.145-6), ⑧が3箇所(p.74, p.105, pp.145-6)使われている。“FIS”ではこうした語り手寄りの訳出はあくまで少数であることも『エマ』の“FIS”と同じ傾向を示している。

ただ“FIS”訳での「説得」と『エマ』の明らかな違いは, 1箇所とはいえ(p.105), 非常に語り手寄りで訳出した“FIS”が存在するという点である。

[19] They had nearly done breakfast, when the sound of a carriage, (almost the first they had

heard since entering Lyme) drew half the party to the window. “It **was** a gentleman’s carriage – a curricle – but only coming round from the stable-yard to the front door – Somebody must be going away. – It **was** driven by a servant in mourning.”

The word curricle made Charles Musgrove jump up, that he might compare it with his own, the servant in mourning roused Anne’s curiosity, . . . (*Persuasion* p.105)

アンたちがほぼ朝食をすませたとき、車の音を耳にし、(ライムにきてからほとんどはじめて聞く車の音だった) 一行のうちの半数が窓べに歩み寄った。紳士用の二頭立て二輪馬車がうまやから正面玄関へと引き出されてきたところであった。だれかが出発するのだ。喪服をつけた召使が御していた。

カリクルという言葉で、チャールズは自分のと比べようととび上がった。喪服の召使はアンの好奇心をかきたて、 . . . (「説得」 p.400)

この“FIS”箇所は、後続の文脈で curricle や the servant in mourning の語が Charles や Anne の耳をとらえたことを述べているところから、登場人物の発話と考えられるが、ここでは「であった」「いた」などの⑧語り手中心の過去時制が使われ、語り手寄りの訳出となっている。翻訳者がなぜこの“FIS”をこのように訳したのかについては明らかではないが、これは“FIS”の一般的訳出傾向にも反する例があることを示している。

この訳例と指標②③④の使用頻度を考え合わせると、「説得」の“FIS”の訳出傾向は『エマ』の“FIS”とほぼ同じであるが、その「登場人物寄り」の度合いは『エマ』のほうが少し大きい、といえるだろう。

一方 [FIS] は前述のように『エマ』の [FIS] とはいささか異なる傾向を示している。というものの、登場人物寄りの訳出がかなり多く、⑥の引用節が7箇所使われているのである。そのうち3箇所では直接話法のマーカーである①と②の両方(p. 139)、またはどちらか一方(①がp.190, ②がp.174)が使われている。

また引用節のない残り3箇所(p.113, p.122, p.144)のなかでも、1箇所(p.144)は⑤の「自分」の使用によって発話者の視点が導入されている。他の2箇所は①から⑧までのマーカーのどれも使わないことによって、地の文とも登場人物の発話ともとれる訳出になっている。

#### 4.3 まとめ

『エマ』『説得』ともに“FIS”と [FIS] の日本語への訳出傾向にはかなり差があった。“FIS”はどちらも、①カギカッコ、②敬体助動詞、③ムードの終助詞、④1人称代名詞(=発話者)が使われた登場人物寄りの訳出が多く、とくに①のカギカッコはほとんどの箇所で見られる。また②③④の中でも、「劇的效果のある直接話法」を示す②と③が多いのも特徴的であった。数の上では、“FIS”の日本語訳の標準形は「カギカッコに入った劇的效果のある直接話法」だと考えていだろう。

また『エマ』と「説得」を比べると、『エマ』のほうが“FIS”をより登場人物寄りに訳出する傾向が見られた。

一方、[FIS] に関しては“FIS”ほど明確に日本語訳の標準形ははっきり現れなかった。

- [20] (1) 直接話法であることを明示した発話としての訳出 (①②③④のひとつもしくは複数を使用)
- (2) 「自分」を使って登場人物の視点を導入した訳出 (⑤を使用)
- (3) 直接話法であることは明示していないが発話であることを示した訳出 (⑥を使用)
- (4) 発話とも地の文とも明示していない中間的な訳出 (①から⑧のどれも使用しない)
- (5) 3人称代名詞 (= 発話者) は語り手寄りだが、現在時制が使われているので、地の文と発話の境界が曖昧になった訳出 (⑦を使用)
- (6) 語り手寄りの訳出 (⑦⑧を使用)

などがあり、『エマ』では(5)(6)の「語り手寄りの訳出」もあるが、「説得」ではなかった。『エマ』の [FIS] のほうが語り手寄りの訳出傾向が強いことがわかった。

## 5 考 察

### 5.1 引用符の有無が“FIS” / [FIS] の日本語に与える影響

引用符の有無が“FIS” / [FIS] の日本語訳に与える影響がかなり大きいことは、前節のまとめで示したように、“FIS”と [FIS] の訳出傾向が『エマ』と『説得』のどちらもでかなり異なることから推測される。どうしてこのように訳出傾向に差が出てくるのか、“FIS” / FIS の日本語への翻訳の過程を、段階を追って考えてみよう。“FIS” / [FIS] の翻訳に際して翻訳者は、

- [21] (1) その箇所が発話であるかどうかを判断する
- (2) 発話だと判断した箇所についてはどの程度「発話らしく」訳出するか、どれくらい登場人物寄りの指標を使うかを定める

という二つの段階をふまなければならない。“FIS”の場合は、引用符の存在によって(1)の判断がかなり容易であろう。これに対して [FIS] では、(1)の判断に個人差が“FIS”の場合より大きく出てくると考えられる。本論では第3節でも述べたように、かなり明確に [FIS] だとわかる箇所、登場人物の声が前景化した箇所を選んだが、それでも筆者の判断が翻訳者の判断と異なる可能性は否めない。“FIS”と [FIS] の訳出傾向がかなり違うのは、この発話かどうかの判断に際して、翻訳者が引用符の存在を重視しているからだと考えていいだろう。しかし、前節の分析によって明らかになったもうひとつのことは、(1)の判断ばかりが“FIS”と [FIS] の訳出傾向を

分けるものではない、ということである。『エマ』や『説得』の [FIS] 訳では「直接話法としては明示されていないが、引用節によって発話だと示されている訳出」「発話と地の文の中間に位置する訳出」が少なからず存在した。つまりこれらは発話だと認識はされているものの、どの程度発話らしく訳すか、つまりどの程度登場人物寄りの指標を使って訳出するかという(2)の段階において、登場人物寄りの訳出の度合いを低くされた [FIS] 箇所なのである。引用符の存在は、翻訳者がある“FIS” / [FIS] 箇所を発話かどうか認定する段階だけでなく、それをどの程度登場人物寄りに発話らしく訳すかを定める段階でも影響力をもっている、といえるだろう。翻訳者は“FIS”ではほぼ自動的に英文テキストの引用符に日本語のカギカッコを対応させ、その結果カギカッコの機能に矛盾しない直接話法の訳文を用いることになるが、[FIS]では、まずそれが発話であるかどうかの認定に迷い、次に発話であると判断したとしても、英文で引用符がないというので日本語でもカギカッコを使わず、訳文も「劇的効果のある直接話法」などはあまり使わない、ということになるのではないだろうか<sup>22)</sup>。

なお、“FIS” / [FIS] を日本語に訳すときに引用符の有無からどれほど影響をうけるかには、個人差があることも『エマ』と「説得」の比較からわかった。『エマ』のほうが「説得」より、“FIS”を登場人物寄りに訳す傾向が強だけでなく、[FIS]を語り手寄りに訳す傾向も強いことがわかったが、これは、『エマ』のほうが、“FIS”と[FIS]の違いを重視していることを示している。『エマ』の翻訳者のほうが、引用符の有無によって[21]の(1)と(2)の判断を変える傾向が大きいのである。

## 5.2 “FIS” / [FIS] の訳出傾向の違いに関する提言

英独仏語の自由間接話法（体験話法）の日本語訳を考える研究では、従来、引用符なしの自由間接話法（体験話法）を主に扱ってきたが、それをどの程度登場人物寄りに訳出するのが望ましいかについてはまだ一致した結論を見ていない。たとえば鈴木（1987）は自由間接話法（体験話法）の箇所をまず直接話法に還元して基本的な意味関係を捕えてから訳すことを奨励している。これは鈴木（1987）以前からも広く提案されている考え方であるが、鈴木氏の主張は外国語教育（とくに日本の大学生のドイツ語習得）においてこの訳出方法が重要であることを強調する点で意義がある。これに対して中川（1983）はこの伝統的な訳出方法以外の可能性を探ることを試みており、日本語で書かれた小説の直接話法以外の発話、思考描出の手法から、自由間接話法（体験話法）の訳出に应用できるものを探している。

第4節の分析結果が示したのは、「直接話法に還元して」という訳出方法が“FIS”ではとられているのに対して、[FIS]の訳出ではとられていないということだった。しかしJane Austenの自由間接話法における引用符の使用に一貫した規則性がないのに、その引用符次第で訳出傾向を大きく変えてしまうことには問題がある。引用符の有無如何に関わらず自由間接話法をどう訳出するかは更に議論が必要であるが、“FIS”を登場人物寄りに訳す一方で[FIS]を語り手寄りで訳すことが、この話法のもつ統語的、直示的性質と比べて引用符を重視しすぎることにつながる

ことは指摘しておかなければならない。

Austen の各種話法がもつ文体論的効果が、日本語への翻訳を通してそのまま全て保たれるような訳が可能だとは考えていない。英語と日本語では話法の仕組みや、もっと広い意味での談話文法が大きく違うのだから、それは無理であろう。しかし、“FIS” の引用符にこだわりすぎず、また [FIS] の発話らしさをもっと積極的に訳文に反映させることで、Austen の小説の妙はさらに日本語の翻訳にも反映されるのではないかと考える。

## 6 結 び

本稿では英語の FIS が日本語に訳出されるときに引用符がもつ影響力を具体的なデータをもとに分析した。分析の方法は、先行研究で指摘されていた人称代名詞の扱い方などを含む 8 項目を訳出傾向を示す指標として設定し、Jane Austen の *Emma* とその阿部知二訳『エマ』、*Persuasion* とその近藤いね子訳「説得」から選んだ“FIS” / [FIS] 箇所を対象に、各指標の使用状況を調べた。その結果、“FIS” では「劇的効果のある直接話法」での訳出が標準的であり、これは [FIS] とは大きく異なることがわかった。[FIS] では、発話と地の文との中間的な訳出や、直接話法性をださない発話としての訳出が多かったほか、語り手寄りの訳出もあった。

第 5 節の考察で述べたように引用符の有無がこれほど訳出傾向を左右することは、“FIS” と [FIS] がもつ英文テキストでの機能を考慮すると適当ではない、と筆者は考える。“FIS” は DS ではなく、統語的性質や直示的表現の扱いは [FIS] と同じなのだから、引用符の存在に影響されて、“FIS” と [FIS] の訳し方を変えすぎるのは問題であろう。

FIS に引用符を用いる小説は時代的に限定されており、“FIS” の訳し方への提言を一般化することはあまり意味がないだろう。しかし、本稿で指摘した翻訳者が“FIS” について引用符を重視しすぎる傾向は、[FIS] において引用符がないことを重視しすぎる傾向、[FIS] を登場人物寄りに訳すことを躊躇する傾向と表裏一体である。その点では、本稿の考察は、FIS に引用符を用いなくなった時代の小説についても応用され得るものと考ええる。

### 註

- 1) 本稿は拙論「英語自由間接話法の日本語訳：事例研究と今後の研究への問題提起」(1993)の延長線上に位置する研究である。
- 2) 英語、ドイツ語、フランス語ともに、この「語り手中心の時制・人称代名詞と登場人物中心の時・場所を表す直示的表現を併用する話法」についての名称は本文中にあげたものの他にも数多くある。英語に関して、日本では伝統的に Jespersen の使った *represented speech* という名称、及びその日本語訳として「描出話法」という名称を使用してきたようだが、現在 *MLA International Bibliography* の *subject index* で採用されているのは *free indirect discourse* (FID) であり、これが最も一般的に使われていると考えてよいだろう。ただ、本稿では、*speech presentation* のための FID で

ある free indirect speech (FIS) と thought presentation のための FID である free indirect thought (FIT) を区別し、前者のみを扱うので、FID という名称を使わなかった。

なお、自由間接話法 (体験話法) 研究に関する文献一覧は Fludernik (1993) の巻末 references (pp.472-523) を参照。Fludernik (1993) は、Banfield (1982) を叩き台に発展してきた観のある近年の自由間接話法 (体験話法) 研究を包括する研究である。

- 3) 保坂・鈴木(1993)参照。自由間接話法 (体験話法) 研究の文献一覧 (日本語文献・欧文文献) に、日本における研究史を加えた、この貴重な書誌を作成された保坂・鈴木両氏の御尽力に謝意を表したい。
- 4) 山口 (1993) では McHale (1978) の提唱した FID indices に基いて「FIS 指標」を設定した。読者がテキストのある箇所を FIS を認知するのはそこに十分な FIS 指標があるときだ、とする考え方である。統語的指標として「疑問文における V-S 倒置」「感嘆文構造」「話題化」「右方転位」を、直示的指標として「主節のなかでの過去完了形と過去進行形」「法助動詞・未来を表す助動詞の過去形」「登場人物中心の時・場所を表す直示的表現と指示代名詞」を、主観性を表す指標として「主観的な価値判断を含んだ形容詞」「強調の副詞」「義務的法性」「認識的法性」「登場人物の視点による指示・呼び掛け」「敬語」を、発話であることを表す指標として「強調のための斜字体」「感嘆符」「疑問符」「引用符」「談話標識」「話し言葉的な語彙」「話し言葉的な談話の構造」を、文脈的指標として「引用節」「近接する発話行為動詞・名詞」「他の登場人物の発話」「発話者である登場人物の物語のなかでの焦点化」をあげた。
- 5) Austen の FIS 研究については、本稿第 2 節で言及するものの他に Page (1972), Phillips (1970) 参照。Burrows (1987) の character narrative は本稿で扱う FIS よりも広い範囲を対象にするが、コンピュータを使った分析で character narrative の性質を明らかにしている。また特に *Emma* の FIS については Flavin (1991), *Persuasion* の FIS (および speech 一般) については Ikeda (1992) 参照。
- 6) 各話法について、例えば次のような例文が考えられる。  
NRSA: He promised to return the next day.  
IS: He said that he would return the next day.  
FIS: He would return tomorrow.  
DS: He said, "I will return tomorrow."  
FDS: I will return tomorrow.
- 7) 引用符付きの FIS を、Austen 自身が FIS の機能を自覚して意識的に使っていたことの証拠とする Pascal (1977, p.47) や Shaw (1990, p.592) は出版社による引用符挿入の可能性を全く考慮していないが、一言、引用符が Austen の使用によるものではない可能性があることへの言及が必要であろう。特に Shaw (1990) では、註で初期の 3 作品の FIS を網羅的に列挙しているところで、引用符付きの FIS のみを FIS として扱っているほどであるので、この点に関する議論はなされるべきであっただろう。
- 8) *Emma* が最初に出版されたのは 1815 年、*Persuasion* は 1818 年である。阿部訳『エマ』、近藤訳「説得」ともに、翻訳に使ったテキストは Chapman 編纂の Oxford 版のものと明記してある。本稿の引用は 1933 年の第 3 版 (1988 年発行) からである。分析の対象した箇所は、初版、第 2 版、第 3 版とも異同はない。『エマ』は中公文庫版を使ったが最初に出版されたのは『世界の文学 6』中央公論社 (1965) である。
- 9) Page (1972 p.123) 及び Burrows (1987, pp.166-7)
- 10) 従来の翻訳テキストと原文の比較をする研究では、翻訳に使用されたテキストの版の問題を考慮していないものが多い。これは自由間接話法 (体験話法) の日本語訳の研究でも気を配らなければな

らない問題であろう。

- 11) 分析に使用した“FIS”／[FIS] 箇所の Chapman 編纂の第3版(1988)でのページ数と行数を記す。  
*Emma* の“FIS”：p.28, ll.16-32, p.46 l.37 - p.47 l.2, p.49 ll.7-14, p.50 ll.17-23, p.70 ll.10-14, p.109 ll.28-32, p.128 ll.31-35, p.156 ll.8-13, p.169 ll.28-37, p.177 l.35 - p.178 l.7, ll.10-15, p.191 ll.22-26, p.193 ll.6-10, p.196 ll.6-10, p.199 ll.19-23, p.209 ll.30-34, p.220 ll.27-31, p.248 ll.33-34, p.251 ll.11-19, p.272 ll.33-38, p.291 ll.15-19, p.297 l.38 - p.298 l.3, p.316 ll.20-25, p.356 l.32 - p.357 l.6, p.359 ll.34-37, p.361 ll.17-18, p.364 ll.20-21, p.380 ll.10-12, p.387 l.38 - p.388 l.5, p.389 ll.16-17, p.390 ll.31-36, p.403 ll.30-33, p.411 ll.24-26, p.424. ll.27-28, p.448. ll.27-28, p.469 ll.12-26, p.479 ll.28-34.  
*Emma* の[FIS]：p.50 ll.8-17, p.70 ll.15-19, p.81 ll.31-35, p.141 l.37 - p.142 l.3, p.204 ll.3-8, p.204 ll.10-14, p.254 ll.4-10, p.298 l.3-5, p.316 ll.32-34, p.363 l.29 - p.364 l.2, p.391 l.6-9, p.424 l.24-26, p.449 ll.20-23, p.466 ll.19-34.  
*Persuasion* の“FIS”：p.13 ll.14-19, p.48 ll.10-11, p.55 ll.8-11, p.74 ll.25-27, p.105 ll.6-10, p.113 ll.21-26, p.114 ll.27-30, p.121 l.16-24, p.122 l.21-22, p.141 ll.1-3, p.141 ll.19-21, p.141 l.28 - p.142 l.13, p.142 ll.30-35, p.143 ll.8-9, p.144 ll.8-12, p.145 l.33 - p.146 l.2, p.149 ll.13-21, p.157 ll.9-10, p.187 ll.30-35, p.190 ll.29-30, p.211 ll.10-11.  
*Persuasion* の[FIS]：p.22 ll.22-32, p.90 ll.32-34, p.112 ll.14-16, p.113 ll.35-37, p.115 ll.9-13, p.122 ll.29-32, p.139 ll.2-7, p.144 ll.1-8, p.174 ll.15-17, p.190 l.20-23.
- 12) [FIS] 箇所認定にあたっては, Sylvia Adamson 氏および浅若裕彦氏との議論に多くを負っている。*Emma* と *Persuasion* のプロットや登場人物の性格設定を考慮に入れたうえで, [FIS] を登場人物の「実際の発話」(登場人物が他の登場人物にむかって実際に発話した, と小説中で意図されていると思われる発話)かどうかを考える両氏の指摘が, [FIS] 認定に欠かせない文脈・内容からの判断として貴重であった。
- 13) *Emma* p.469 ll.12-26, *Persuasion* p.113 ll.21-26; p.144 ll.8-12.
- 14) 山口(1993)では鎌田(1988)の枠組みをもとに, 「直接話法」「準直接話法」「間接話法」の3話法を日本語の話法の基本的な範疇として Austen の *Pride and Prejudice* の5種類の訳文を対象に事例研究を行ったが, 方法論上の一番の問題点は「(準)直接話法」と「間接話法」を区別する直示的表現がいつも訳文中に存在するとは限らないことであった。発話者を指す人称代名詞が明示されていないので, 三人称代名詞を補うことも一人称代名詞を補うことも「自分」を補うこともできるという状況があったときに, 山口(1993)ではこれを「準直接話法」に分類した。しかし, こうした文を FIS の日本語訳上の特別な工夫として評価する研究(保坂1981, p.99)などもあることから, この分類の不備な点を自覚するにいたった。
- 15) 日本語の引用・話法に関しては以下の研究を参照。奥津(1968)(1993), 遠藤(1982), 鎌田(1983)(1988), Coulmas(1985), 広瀬(1988), 藤田(1988), 砂川(1988)(1989), 中園(1994)。
- 16) 藤田(1994)は日本語の引用構造を厳密に統語論的に研究する立場をとり, この劇的効果の有無は文体上の問題にすぎないとして, 「準直接話法」の設定の必要性を認めない。しかし本稿では文体上の問題も考察するので劇的効果の有無を重視する。
- 17) 「自分」を1人称, または2人称として使う言語使用域があるが, 本稿で対象としたテキストでは, そうした使い方は見られなかった。
- 18) [13]の訳文(13)「でも先日自分があそこの家政婦の悪口をいったのを, すこしも後悔しないわ」は, 筆者の言語直感ではやや不自然に思われる。ムードの終助詞「わ」の促す直接話法読みが, 直接話法読みができない「自分」と矛盾する。



- 19) he was fully convinced. . . は I am fully convinced. . . を反映した [FIS] とは考えにくい。下線部は he could assure her が談話を進める際に挿入された I can assure you を反映していると考えられる。また、このあとテキストでは “Ah! there is one difficulty unprovided for,” cried Emma. “I am sure William Larkins will not like it. You must get his consent before you ask mine.” と続くが、これは [FIS] で描出されたの Mr. Knightley の発話のなかに出てきた William Larkins からの連想であると考えられる。こうした理由から下線部を [FIS] と認定した。
- 20) 下線部の前の and that he must . . . も [FIS] らしい指標 (indeed の使い方) があるが、that 節のなかなので、第3節で述べた本稿の方針により、[FIS] とはしなかった。
- 21) この箇所を FIT ではなくて [FIS] と判断したのは後続文脈にある and she listened to her による。
- 22) “FIS” / [FIS] の日本語訳において英文での引用符の有無がカギカッコの有無に影響を与えることがはっきりと *Pride and Prejudice* の場合に見られる。

Mrs. Bennet invited him [=Mr. Bingley] to dine with them; but, with many expressions of concern, he confessed himself engaged elsewhere.

[1] “Next time you call,” said she, “I hope we shall be more lucky.”

[2] He should be particularly happy at any time, &c. &c.: and if she would give him leave, would take an early opportunity of waiting on them.

[3] “Can you come to-morrow?”

[4] Yes, he had no engagement at all for to-morrow; and her invitation was accepted with alacrity. (344) (参照のために番号をうった)

これは *Pride and Prejudice* (ed. R.W. Chapman, 3rd ed. 1933; rpt. Oxford: Oxford University Press 1988) からの引用であり、ここでは [1] と [3] が “FIS” による Mrs. Bennet の発話で [2] と [4] が [FIS] による Mr. Bingley の発話となっている。これは1813年の初版での引用符の使い方と同じで J.C. Squire 編による1928年版 (London: William Heineman Ltd.) も同じ引用符の使い方をしている。これに対して R.B. Johnson 編による1892版 (London) では [2] と [4] にも引用符があり “FIS” として現れている。

この箇所の日本語訳を見てみると、[2] [4] に引用符のない Squire 編のテキストを翻訳の際に使用した富田彬訳『高慢と偏見』(東京:岩波文庫 1950)と、Chapman 編のテキストを使用した阿部知二訳『高慢と偏見』(東京:河出書房新社 1963)は、[1] [3] にカギカッコを使い、[2] [4] にはカギカッコを使っていない。が、[1] から [4] 全てが “FIS” である Johnson 編を使った平田禿木訳『高慢と偏見』(東京:国民文庫刊行会 1928)は、[1] から [4] 全てに二重カギ(『』)を使っている。カギカッコではなく二重カギが使われているのは、この訳の全編通じてのことで、発話のマーカ―としての機能は、カギカッコと同じだと考えてよい。これは、英文テキストの引用符の有無が、日本語の訳文でのカギッコ(二重カギ)への有無に反映された例だと考えられる。

#### テキスト

阿部知二 (1974) 『エマ』(*Emma* の翻訳) 東京: 中公文庫

Austen, Jane. (1988) *Emma*. ed. by R. W. Chapman. Oxford: Oxford University Press.

———— (1988) *Persuasion* ed. by R. W. Chapman. Oxford: Oxford University Press.

近藤いね子 (1975) 『説得』『世界文学全集21』東京: 講談社 (*Persuasion* の翻訳)

参考文献

- 浅若裕彦 (1992) 「『エマ』における話法の交代」 *Zephyr* 6: pp.15-26. 京都大学大学院英文学研究会  
—— (1994) 「オースティン以前・オースティン以後 — 自由間接話法に関する一考察」 *Zephyr* 7:  
pp.1-13. 京都大学大学院英文学研究会
- Atkins, Siward. (1993) *Free indirect style and the rhetoric of fiction in Jane Austen and George Eliot*.  
Unpublished Ph.D dissertation. Cambridge University.
- Banfield, Ann (1982) *Unspeakable Sentences. Narration and Representation in the Language of Fiction*. Bos-  
ton: Routledge & Kegan Paul.
- Burrows, J. Frederick. (1987) *Computation into Criticism: A Study of Jane Austen's Novels and an Experi-  
ment in Method*. Oxford: Clarendon Press.
- Coulmas, Florian. (1985) Direct and indirect speech: general problems and problems of Japanese. *Jour-  
nal of Pragmatics* 9: pp.41-63.
- 遠藤裕子 (1982) 「日本語の話法」『言語』 3月号: 86-94. 東京: 大修館書店
- Flavin, Louise (1991) Free indirect discourse and clever heroine of *Emma*. *Persuasions* 13: pp.50-57.
- Fludernik, Monika (1993) *The Fictions of Language and the Languages of Fiction*. London: Routledge.
- 藤田保幸 (1988) 「『引用』論の視界」『日本語学』 9月号: pp.30-45  
—— (1989) 「引用のくぎり方」『日本語学』 6月号: pp.59-67  
—— (1994) 「話法論補遺」京都言語学コロキウム研究発表
- 広瀬幸生 (1988) 「言語表現のレベルと話法」『日本語学』 9月号: pp.4-13
- 保坂宗重 (1969) 「Tonio Krögerにおける体験話法」『茨城大学教養部紀要』 1: pp.147-157  
—— (1974) 「ベルリン・アレキサンダー広場」における体験話法 『茨城大学教養部紀要』 6:  
pp.83-116  
—— (1981) 「日本語における体験話法 — 西洋語の体験話法との比較において」『茨城大学教養  
部紀要』 13: pp.95-109
- 保坂宗重・鈴木康志 (1993) 『体験話法(自由間接話法) 文献一覧 — わが国における体験話法研究』  
茨城大学教養部
- Ikeda, Yuko (1992) *Speech in Persuasion*. 『九州英文学研究』 第9号: pp.39-67 日本英文学会九州支  
部
- 池上嘉彦 (1986) 「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」日本記号学会編『記号学研  
究6: 語り—文化のナラトロジー』 pp.61-74
- 鎌田 修 (1983) 「日本語の間接話法」『言語』 9月号: pp.108-117  
—— (1988) 「日本語の伝達表現」『日本語学』 9月号: pp.59-72
- 笠原勝朗 (1991) 『英米文学翻訳書目』 東京: 沖積舎
- 国立国会図書館編 (1959) 『翻訳文学目録』 東京: 風間書房
- 久野 瞳 (1978) 『談話の文法』 東京: 大修館
- Leech, Geoffrey N., and Michael H. Short (1981) *Style in Fiction. A Linguistic Introduction to English  
Fictional Prose*. London: Longman.
- McHale, Brian (1978) Free indirect discourse: a survey of recent accounts. *Poetics and Theory of Litera-  
ture (PTL)* 3: pp.249-87.
- 牧野成一 (1983) 「物語の文章における時制の転換」『言語』 12月号: pp.109-112.
- 松井三郎 (1959) 「Le Style Indirect Libre — 日本語との比較」『フランス語研究』 23: pp.10-14.  
—— (1983) 「日本語における自由間接話法」『etudes françaises』 19: pp.3-24. 大阪外国語大学

フランス語研究室

- 中川ゆきこ (1983) 『自由間接話法』 京都：あぼろん社
- 中山真彦 (1990) 「物語テキストにおける『視点』の意味—フランス語の場合・日本語の場合—」  
『人文論叢』16: pp.41-54 東京工業大学
- 中園篤典 (1994) 「引用文のダイクシス—発話行為論からの分析—」『言語研究』105: pp.87-109
- 野口武彦 (1994) 『三人称の発見まで』 東京：筑摩書房
- 奥津敬一郎 (1968) 「引用構造と間接化転形」『言語研究』56: pp.1-26
- (1993) 「引用」『国文学』11月号: pp.74-9
- Page, Norman (1972) *The Language of Jane Austen*. Oxford: Blackwell.
- (1988) *Speech in the English Novel* [1973]. London: Methuen, second revised edition.
- Parkes, Malcolm B. (1992) *Pause and Effect: Punctuation in the West*. Hampshire: Scolar Press
- Pascal, Roy (1977) *The Dual Voice. Free Indirect Speech and its Functioning in the Nineteenth Century European Novel*. Manchester: Manchester University Press.
- Phillips, K.C. (1970) *Jane Austen's Enligh*. London: Andre Deutsch
- Quirk, et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Shaw, Narelle (1990) Free indirect speech and Jane Austen's 1816 revision of *Northanger Abbey*. *SEL* 30: pp.591-601.
- 砂川有理子 (1988) 「引用における場の二重性について」『日本語学』9月号: pp.14-29
- (1989) 「引用と話法」『日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法と文体(上)』355-387
- 鈴木康志 (1987) 「ドイツ語体験話法の訳し方—時称・人称の変換操作—」『外国語教育論集』9: pp.213-234 筑波大学外国語センター
- (1992) 「体験話法の識別法について」『ドイツ文学』88: pp.77-88 日本独文学会
- (1994) 「『ブデンプローク家の人々』における体験話法—地の文との境界線の解釈をめぐって—」日本独文学会1994年春季研究発表会研究発表
- Tandrup, Brithe (1983) A trap of misreading: free indirect style and the critique of the gothic in *Northanger Abbey*. *The Romantic Heritage: A Collection of Critical Essays*: pp.81-91. Copenhagen: University of Copenhagen.
- 谷村淳次郎 (1978) 「描出話法の日本語訳について—新しい訳文の必要性—」『表現研究』27: pp.22-25
- Toolan, Michael J. (1988) *Narrative: A Critical Linguistic Introduction*. London: Routledge.
- 山口美知代 (1993) 「英語自由間接話法の日本語訳：事例研究と今後の研究への問題提起」『京都府立大学学術報告・人文』45: pp.15-36

Translation of Free Indirect Speech and the Influence of Quotation Marks over Japanese Translators:  
Jane Austen's *Emma* and *Persuasion*

Michiyo Yamaguchi

In Jane Austen's novels free indirect speech (FIS) is often demarcated with quotation marks, a graphic device that has not been in common usage since the mid-19th century. This paper investigates the degree to which Japanese translators are influenced by these quotation marks during the translation of FIS into Japanese. A comparison is made between the translation of FIS passages appearing with quotation marks, "FIS", and passages appearing without, [FIS], in *Emma* and *Persuasion*. It is found that "FIS" is mostly translated in a character-centred way while this is not always the case with [FIS]. This is not only due to relative difficulties in recognising [FIS] as speech, it is often identified as such and the corresponding Japanese passage is marked with a reporting clause. However, the translators seem reluctant to use the indices of a character's direct speech, such as quotation marks, honorific endings, particles and the first person pronouns. The conclusion drawn is that Japanese translators rely heavily on quotation marks in English text when determining how character-centred their translation of FIS can be. It is suggested that not only "FIS" but also [FIS] should be translated in a character-centred way, since they share the syntactic and deictic features despite the differences in punctuation.

(1994年7月27日受理)

(やまぐち みちよ 女子短期大学部講師)